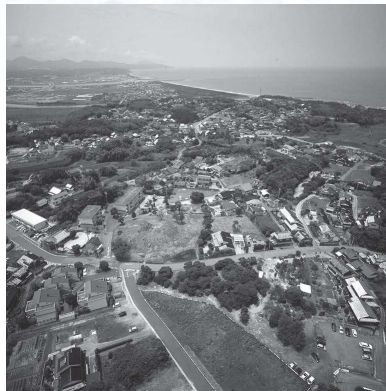


弥生時代以降、稲作が広まり、人々が定住するようになると、まとまった集団が形成されるようになり、そしてその指導者が豪族（こうぞく）になっていきます。益田平野には有力な勢力がいたようで、乙吉（おとし）下本郷から鎌手あたりまでの連続した台地上に、彼らの首長の墓と考えられる古墳が残っています。

その中でも古いものが四塚山古墳群（下本郷町）で、団地造成時に、前期古墳（4世紀）を象徴する三角縁神獸鏡（さんかくふちしんじゅうきょう）が発見されました。続く4世紀後半築造の大元古墳群（県史跡・遠田町）は、1号墳が全長86mの前方後円墳で、現時点では石見地方最大の古墳です。

国の史跡となっている5世紀築造のスクモ塚古墳（久城町）は、古墳時代中期を代表する大型古墳です。造り出し付円墳（直径57m）とする説と前方後円墳（全長100m）とする説がありますが、いずれにしても県内でも屈指の大きさを誇ります。

6世紀築造の小丸山古墳（市史跡・乙吉町）は全長52mの前方後円墳で、周囲に溝と外堤を備えた石見地方唯一の形態をしています。



史跡 スクモ塚古墳（写真は島根県埋蔵文化財調査センター提供）

6～7世紀には鵜の鼻（うのびな）に相次いで古墳が造られ、かつて50基以上の小円墳（直径10m以下）がありました。現在でも約30基の古墳が残っています（鵜の鼻古墳群（県史跡・遠田町））。

これらの古墳はいずれも海が見えるところに造られています。また大元1号墳は海側の地山斜面を利用して造られ、海側の古墳側面の葺き石をより丁寧に積んでおり、海から見て大きく、立派に見えるように造られているという特徴があります。

このことは、これらの古墳が日本海を意識して、あるいは日本海から見られることを意識して造られたことを示しており、これらの古墳を造った勢力が、日本海との関わりが深かった可能性を示しています。